

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 142号

2024年 12月

白色のヒガンバナ

秋の彼岸の頃になると、稲刈りを終えた田んぼの畔に赤色のヒガンバナが咲き、なんとなく寂しさを感じる初秋の風景に彩りを加えます（写真-1）。2023年10月2日に明和町坂本を散歩していたところ赤色のヒガンバナに混じり、色調が異なるヒガンバナを確認したので報告します。最近では、淡い黄色を帯びた株が植栽されているのを目にすることがありますが、なかには純白に近い株もあるようです。株の背丈は、赤色のヒガンバナと同程度である印象があります。今回確認した株は、淡い黄色でも純白でもなく、白色を基調とした地に朱色が入るもので（写真-2）、朱の入り具合は個体により異なっていました。なかにはピンク色に近い株もみられました（写真-3）。赤色のヒガンバナに比べると背丈は低く、花も小さい特徴がありました（写真-4）。また、花期の終盤に近いくすんだ赤色のヒガンバナに混じり、新鮮な花を咲かせていたので（写真-5）、出現時期は赤色の株よりも遅いのかもしれません。来シーズンは咲く時期に違いがあるのか観察したいと思います。

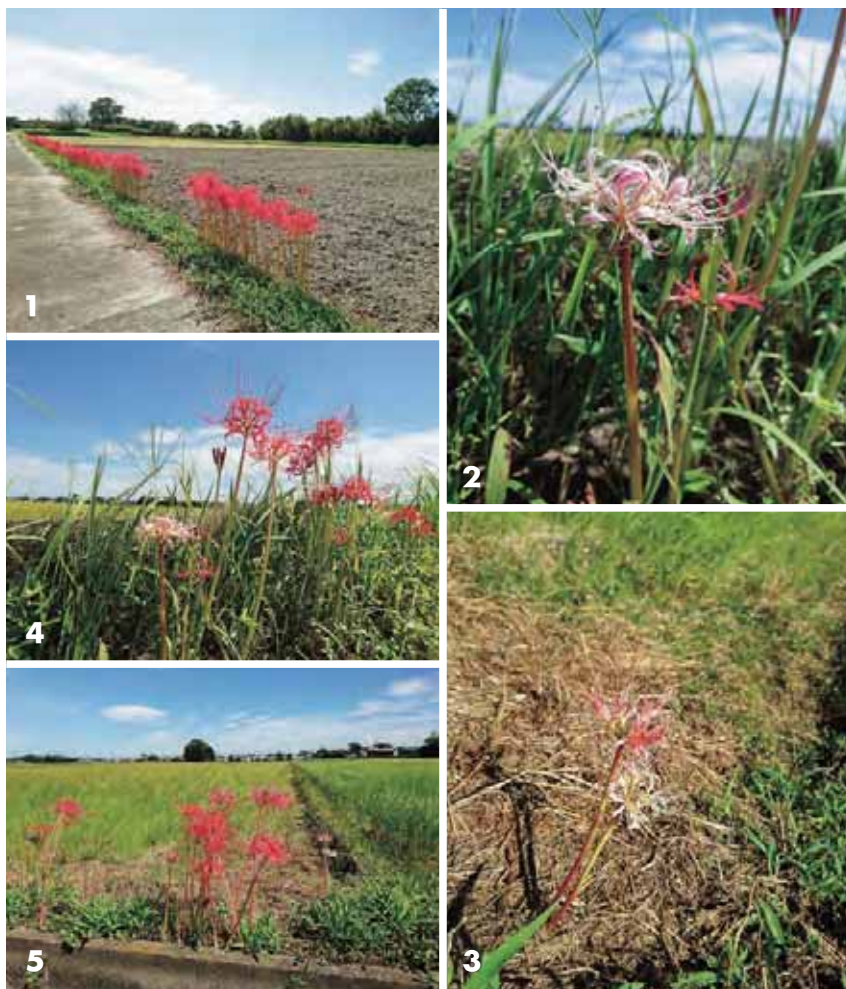


写真 1.水田脇のヒガンバナ（2023年10月2日）、2.白色の地に朱色が入る株、3.花弁の中央が朱色の株（手前）と花弁全体がピンク色の株（奥）、4.ヒガンバナに比べると背丈が低い白色の株、5.くすんだ赤色の花に混じって咲く白い株

（中野 環：度会町大野木1711-1）

三重県におけるツキノワグマの盛衰

清水 善吉



図1 ツキノワグマ (2024年10月31日, 大台町大杉, 自動撮影)



図2 ツキノワグマの錯誤捕獲現場。中央の大きく破損した立木に罠を括っていた (1998年11月22日, 松阪市嬉野宮野町)

クマニュースが全国を駆け巡っています。三重県でもツキノワグマ出没のニュースが頻繁に報じられ (図1), 「クマアラート」なるものを県が発令し, 煽っている感じがしないでもありません。本種は, 木に登ってドングリ類を食べているイメージが強いですが, 食肉類に分類される動物で, 当然, 肉食も行います。ニュースも, 食肉獣にかかわる部分が多いように思います。県産ツキノワグマについて, 標本を収集し, 保護種指定にかかわった身として, これまでの推移を記録し, 少しだけ考えを述べたいと思います。

表1 有害駆除等によって捕獲したツキノワグマ (標本は三重県総合博物館収蔵)

No.	年月日	市町	字	地名	性	体重 (kg)	全長 (cm)	尾長 (cm)	体長 (cm)
1	1994/9/5	大台町	大杉	父ヶ谷	オス	40.0	121.0	7.0	147.0
2	1994/10/13	大台町	大杉	水越谷	メス	32.5			128.5
3	1995/10/4	尾鷲市	南浦	古和谷	メス	35.0	123.0	6.0	125.0
4	1996/8/5	紀北町	相賀	光谷	オス	50.0			150.0
5	1996/8/9	大台町	大杉	千尋	メス	35.0			126.0
6	1998/11/22	松阪市	嬉野宮野町		メス	36.0	120.0	6.0	114.0
7	1999/12/19	松阪市	嬉野合ヶ野町		オス	25.0	107.0	5.0	102.0

私は1994～2000年度まで三重県立博物館に在職し, 標本収集が仕事でしたので, 7個体のツキノワグマ標本を収集しました (表1)。表1のNo.1～5は有害駆除, No.6と7は錯誤捕獲です。前者は植林木への樹皮剥ぎ被害の防止, 後者はイノシシ罠に誤ってかかったもので, 危険—実際に現場をみましたが, 周りの樹木がすべてなぎ倒されていた (図2) —ということで警察により射殺されました。

その後2003年度に県自然環境室へ異動となり, 再び本種とのかかわりが生じました。同年に施行された県自然環境保全条例に基づい

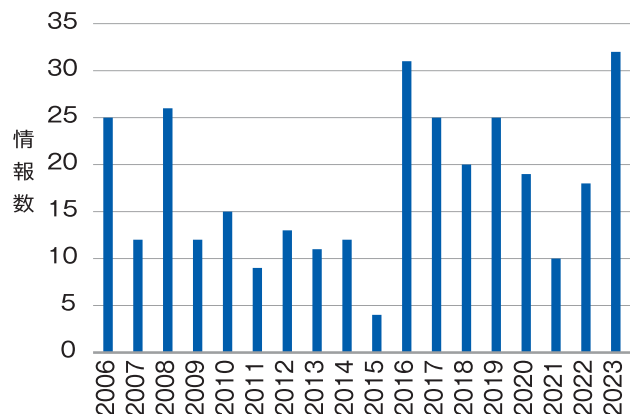


図3 三重県におけるツキノワグマ目撃情報の推移2006～2023年 (三重県HP;<https://www.pref.mie.lg.jp/JTAISAKU/HP/m0114900048.htm>.2024.11.23閲覧を改変)

表2 三重・和歌山・奈良県における錯誤捕獲個体

No.	年月日	県	市町村	体重(kg)	体長(cm)	性別	文献
1	2015/5/17	三重	いなべ市	80	130	オス	1, 2
2	2018/5/29	三重	いなべ市	94	140	オス	1
3	2007/8/7	和歌山	有田川町	62	157	オス	1
4	2008/9/21	奈良	五條市	64	130	オス	1
5	2008/12/10	三重	尾鷲市	46	120	オス	1
6	2010/6/3	和歌山	日高川町	41.5	113.5	オス	1
7	2010/10/9	和歌山	印南町	65	120	メス	1
8	2010/11/3	三重	大台町	27	100	メス	1
9	2010/11/16	和歌山	紀美野町	38	118.5	メス	11
10	2010/12/13	和歌山	有田川町	55	133	オス	1
11	2011/12/14	和歌山	有田川町	53	129	オス	1
12	2012/6/19	和歌山	紀の川市	34.9	112	オス	1
13	2012/8/24	和歌山	湯浅町	65	132	オス	1
14	2012/8/26	和歌山	有田川町	32	112.9	メス	1
15	2013/1/18	和歌山	有田川町	42	128	オス	1
16	2013/1/27	和歌山	有田川町	42.5	127	オス	1
17	2014/5/7	和歌山	日高川町	29	109	メス	1
18	2014/5/27	和歌山	日高川町	34.5	109	オス	1
19	2015/5/30	和歌山	橋本市	48	129.7	オス	11
20	2015/6/10	和歌山	田辺市	39.5	123.2	オス	1
21	2015/6/19	三重	津市	58	120	オス	1, 2
22	2015/8/22	三重	熊野市	39	110	メス	1, 2
23	2015/10/2	和歌山	高野町	30	97	オス	1
24	2016/10/21	三重	熊野市	30	100	メス	1
25	2016/12/8	和歌山	田辺市	60	114	メス	1
26	2018/5/8	三重	熊野市	52	100	オス	1
27	2018/6/26	奈良	上北山村	34		メス	4
28	2018/10/24	奈良	五條市	62		メス	4
29	2019/12/8	三重	紀北町	35	119(全長)	不明	1
30	2021/7/26	奈良	十津川村	42		オス	5
31	2021/12/21	奈良	五條市	63		オス	5
32	2023/5/18	奈良	黒滝村	22		オス	6
33	2023/8/6	奈良	上北山村	59		オス	6
34	2023/10/6	奈良	川上村	44.5		メス	6
35	2023/11/10	奈良	野迫川村	72		オス	6
36	2023/11/17	奈良	上北山村	72		オス	6
37	2023/12/11	奈良	上北山村	95		オス	6
38	2023/12/19	奈良	上北山村	55		メス	6
39	2023/12/19	奈良	上北山村	27		オス	6
40	2023/12/23	奈良	下市町	40		オス	6
41	2024/7/3	三重	紀北町	34	119	オス	1
42	2024/8/23	三重	南伊勢町	93	130	オス	1
43	2024/10/19	三重	紀北町	15	81.5	不明	3

文献1；ツキノワグマ出没情報リスト ;<http://sukeroku.blog55.fc2.com/blog-category-53.html>. 2024.11.23 閲覧, 文献2；佐野明 2017. 南紀生物 59(1), 文献3；紀勢新聞 2024 年 9 月 25 日付, 文献4, 5, 6; 奈良県 2019, 2022, 2024. 奈良県ツキノワグマ保護管理計画.

て、希少野生動植物20種を指定するようにと指示があり、博物館時代に築いた人脈を駆使して選定し、その内の1種にツキノワグマをいれました。当時、本種は紀伊山地で180頭と推定されており（自然環境研究センター1993；平成4年度クマ類の生息実態報告書）、まさに希少種の筆頭格でした。狩猟は1994年から禁止され、有害駆除も1996年を最後に行われておらず、指定についての異論はでませんでした。指定後は、錯誤捕獲個体についても奥山への放獣が原則となり、その方針は現在も続いています。

三重県は、2006年度から目撃情報等の収集を開始しており、目撃がすべて本種とは限りませんが、増減しながら概ね増加傾向にあります（図3）。とくに今年は、前述のように「アラート」を発令していることもあり11月13日時点で141件にあがっています（三重県 HP；<https://www.pref.mie.lg.jp/TOPICS/m0026100227.htm>. 2024.11.23 閲覧）。確認市町は、14市9町に及んでおり（若林2009；三重の生きものだより（40）、ツキノワグマ出没情報マップ <https://www.pref.mie.lg.jp/JTAISAKU/HP/m0114900048.htm>. 同、ツキノワグマ出没情報リスト；<http://sukeroku.blog55.fc2.com/blog-category-53.html>. 同）、未確認は東員・木曽岬・朝日・川越・明和・玉城各町の平野部に位置する自治体のみです。環境省の調査でも（生物多様性センター2019；中大型哺乳類調査調査報告書）、県内の生息域は拡大傾向を示しており、2001～2003年度に比べて176.7%に増加しています。

生息域拡大にともなって、人との軋轢以外にも懸念される点があります。鈴鹿山地では江戸時代末期に絶滅したとされており（清水・富田1991；菰野

町史)、紀伊山地のツキノワグマはその以前から長い年月にわたり隔離された結果、「紀伊半島個体群」として位置づけられています。小型であることが特徴とされており(石井2014; レッドデータブック2014 1哺乳類)、表1に示した紀伊山地産個体の体重・体長は25~50kg(平均36.2kg, n=7), 102~150cm(平均127.5cm, n=7)でした。図鑑(阿部編2008; 日本の哺乳類改訂2版)には本種の体重は70~120kgとありますので、小型であることは間違いないようです。

また、三重・和歌山・奈良県による錯誤捕獲個体のネット情報等を収集し、表2に示しました。なお、体長については計測方法が不確かであり改善が必要です。哺乳類の外部計測値の基本として用いられる全長(仰向けに寝かせて吻端から尾端)と尾長(いずれも毛を含めない)を計測し、全長から尾長を引いて頭胴長を算出すべきです。せっかくの機会ですので、比較検討することが可能な形式で残してもらうことを期待します。

捕獲は2007年から2024年にかけて43件の情報があり、性比は圧倒的にオスが多く29個体(67%)、メス12個体(28%)、不明2個体となっています。三重県北部のいなべ市で捕獲された2個体(表2-No.1, 2)は本州中部地方の個体群と同一と思われる、平均体重は87kgです。また、紀伊半島個体群(表2-No.3~43)の体重・体長は15~95kg(平均47.6kg, n=41)・97~157cm(平均117.6cm, n=27)でした。小型であることには変わりはありませんが、近年は大型化傾向にあることが認められ、100kg近い個体も確認されています。紀伊山地個体群が小型であったのは、強い捕獲圧の影響であった可能性も否定できません。さらに、生息域の拡大は、従来は分布の空白域である布引・室生山地にも生息情報をもたらしており(例えば、名張市青蓮寺2022年6月18日動画撮影)、鈴鹿山地と紀伊山地の分布域を隔てる空間はなくなりつつあります。今後は、鈴鹿山地からの南下、紀伊山地からの北上により、両地域のツキノワグマ間に交流が生まれ、紀伊山地個体群の独自性が失われる可能性もあります。

そのような独自性は、ほとんどの人にとってはどうでもよいことであり、気になるのは人との軋轢でしょう。本種が里に出没する原因について、山に餌がないからと、今になっても主張する人がいます。私は、そのコメントを聞くたびに40年ほど前の田舎のようすを思い出します。当時、ニホンザルが里に出没し、畑の作物に被害を与えていましたが、山に餌がないからあれらも可哀そうと、大目にみる風潮がありました。その結果、どのような事態になったかは説明する必要はないと思います。田舎では、人が檻の中で野菜を作っています。

ツキノワグマは、個体数が増えたから里にも出没してくるのであり、県内における最近の個体数調査はされていませんが、紀伊山地を構成する奈良県では174.6~466.7頭(中央値267.3頭)と推定されており(高田・若山2021; 奈良県林業技術センター研究報告(50))、紀伊半島三県で180頭からは大きく増加しています。また、里の人口減少と無縁ではなく、本種にとって里は餌の豊富な魅力的な場所であり、そして、人は恐れるに足りない生きものであると認識されつつあるように感じます。クマは臆病な動物と言われますが、それは自分よりも強い相手に対してであって、野生動物が弱い相手に対して臆病になる理由はまったくありません。

ツキノワグマは、絶滅の恐れが高かったことから県指定希少野生動植物種になっているのであり、保護施策の成果により危機を脱した時点で見直しが必要と、指定作業にかかわった者として切に思います。本種は、ニホンザルやニホンジカと比べて人身被害の可能性が格段に高い動物です。クマたちに、里が自分たちの領域と認識される前に有効な対策を講じることが重要です。具体的対策としては、指定種を解除して里に出没する個体の駆除を可能にすることや、生息個体数を継続して監視していくことが入口でしょう。クマもすむ山こそが日本の自然であり、保護か駆除の二者択一になることがないよう願っています。

(しみず ぜんきち: 松阪市日丘町1386-17)

リュウキュウサンショウクイー中勢に現れた

今 堀 聖 史

三重県の南西はるかに琉球列島があり、その島々に生息するリュウキュウサンショウクイが分布を広げています。この小鳥が中勢地内で越冬しているそうだと数年前に聞いたものの、老いの身には縁がなさそうと気にも留めていませんでした。今年6月中旬に津市郊外の林道を横切る小鳥の群れに見慣れない一羽が前方の枝で虫を捕っていました。すぐ青葉の重なりに紛れてしまいましたが、慌てて写した数枚に予期していなかった小鳥ーリュウキュウサンショウクイの姿がありました（写真1）。数年前から県内でも観察例が増えつつある本種の状況を紹介します。

リュウキュウサンショウクイが1980年代後半から東へ北へと生息域をひろげ、2010年ころには関東まで分布するようになった経過が報告されています(三上・上田2011; Bird Research, 7)。また、2016年2～3月に関西で観察された十数例についての報告もあります(和田2016; むくどり通信 (245))。三重県内においてリュウキュウサンショウクイと明記された記録は2021年以降に三例あり(しろちどり; 2021 (110), 2023 (116)・(117))、私の観察は県内4例目になります。サンショウクイとの識別が定かでなかった観察例が過去にもあるかもしれませんが、県内では最近になって渡来する個体数が増えてきたのではないかと推定しています。

三例目の個体が観察されたのは2022年晩秋で、私が観察した時期は2024年6月です。フィールドは同じで、観察地点の距離が200mほど離れているだけです。初夏の観察ですので繁殖の可能性もあり、また、妄想のような仮定ですが同一個体だとすると1年8ヶ月の期間をこの地で過ごしていたことになり、留鳥と言えそうです。ここは私にとって身近なフィールドでもあり、研究者やマニアの耳目を集めている鳥に再び出会いたいと思っています。

サンショウクイ(写真2)は夏鳥で、渡来する個体数が年々減少しており出会いが難しい鳥になっています。一方、リュウキュウサンショウクイは冬から春に観察でき、今後は県内に渡来する個体数も増えるのではと期待しています。以下に、私の観察経験や様々な報告を参考にして、観察のポイントを記します。

- ・エナガ、メジロ、カラ類の混群の周辺に現れることが多い。
- ・シルエットは“胴長の大きいエナガ”というイメージ、体の色は黒っぽい。
- ・平地から標高1200mまで観察されていて、特定の植生を選ばない。
- ・都市鳥化しているとも言われ、公園などでの観察例も多い。
- ・リリリーと鳴く(虫の音のように聞こえる人もいるそうだ)。



写真1 リュウキュウサンショウクイ (2024.6.13 津市郊外)



写真2 サンショウクイ (2009.5.4 長野県岡谷市_塩嶺御立公園「小鳥の森」)

(いまほり きよふみ: 津市久居小野辺町1454-30)

えっ、こんな所にパッションフルーツ？ キカラスウリじゃないし～、オオカラスウリがなぜ？？

麻 生 晴 子

2023年12月11日，亀山市御幸町の鈴鹿川高水敷で，オオカラスウリの果実を採集した（以下，亀山市を省略）．その後の調査や情報提供を受けて，太岡寺町・小野町・関町会下・野村町・北鹿島町の5町でも確認した．最初に採集した御幸町の果実の大きさは，直径約7.5cm，長さ約8.5cm，重さ約160gのオレンジ色の楕円形で，まず大きさに驚いた．

〈情報提供〉◇太岡寺町町民・市産業環境部職員；同町で3，4年前から大きな果実を確認している．◇小野町町民；5年程前から大きいカラスウリを見て，ここは肥えた土地だと思った．◇元鈴鹿植物研究会のご夫妻；小野町で7，8年前にカラスウリのような花が，午前中にまだ咲いているのを見たが，その後は確認に来ていない．今回，新聞記事を見て連絡．◇菅内町町民；現在河川敷の工事をしてい



写真1 左；カラスウリの成熟果，
右；オオカラスウリ成熟果(2023.12.12
撮影)



写真2 オオカラスウリ未熟果
(2023.12.12撮影)



写真3 2024.9.25 6:18頃 雄花
(総状) 花径約10cm (糸状含む)



写真4 2024.8.24 5:15頃 雌花
(単生) 花径約7cm (糸状含む) 加工
有り



写真5 雄花のがく片は，鋸歯状の
切れ込み多くある



写真6 雌花のがく片は，鋸歯状の
切れ込みが片側各1～2箇所，またはない
物もある



写真7 3分岐する巻きひげ (2分岐が
多い)



写真8 掘り起こした根塊 (想定外に
大きく，分岐も多く折れた)



写真9 果実を輪切りと縦割り，種子
楕円 (味は苦い)

る所で今は刈られたが、昨年大きいカラスウリを見た。

〈分布状況〉亀山市内では自動車道路の名阪国道や東名阪国道、国道1号、国道1号バイパスなどが交差する地域に集中している。「亀山は交通の要衝」と言われ、何か関係するのであろうか？ 野鳥による周食型散布か？加えて、小野町から御幸町間の鈴鹿川の高水敷に点在。堤防敷そばの私有地（畑）の土手約30mにわたり生育している個体群について、所有者はオオカラスウリを知らず、ここには何も蒔いていないとの事であった。

〈観察および撮影〉花の撮影に適する場所が刈り取られていたため、別の場所で本年7月29日から撮影を開始。9月25日までに15回程度、夜中や未明に撮影に出向いた。特徴等は写真のキャプションに明記。

この度、オオカラスウリについてご教示いただいた、三重県総合博物館学芸員の森田奈菜さん、本会の山本和彦さん、ありがとうございました。引き続き調査、観察して行く予定です。

（あそう はるこ：鈴鹿市中富田町）

三重県産タイワンナツメガイについて

中 野 環

タイワンナツメガイは、潮間帯付近のアマモ場に生息する種類で、大きさは40mmになります（奥谷編著2017）。和名からも南方系の種であることが想像でき、三重県では採集は難しいのですが、30mmを超える大きなナツメガイをみつけると、ついタイワンナツメガイではないかと期待してしまいます。かつての分布は沖縄以南でしたが（波部1961）、1997年頃から鹿児島県で確認されはじめ、2004年には一度に千個以上の個体が打上げられたので（江川・坂下2005）、現在の分布は九州南部以南になっています。また、和歌山県では2002年以降に19個体の死殻が確認されましたが（中本ほか2006）、2023年時点では確認できないようです。そのようなタイワンナツメガイを、死殻ですが2024年に三重県内で複数個得ることができました。過去には県内の記録がないと思っていたのですが、三重県総合博物館が所蔵標本について、同館特別利用申請（2024年4月28日付け文書）を行い、5月に調査をしたところ、志摩市船越産の2個体を確認しましたので、あわせて報告します。

タイワンナツメガイは、北牟婁郡紀北町の海岸で2024年4月6日に1個体、4月24日に9個体を確認しました（写真1）。最大個体は、殻長45.29mm、最小個体は36.17mmで、10個体の平均は41.35mmでした。先述した和歌山県産の19個体のうち、田辺湾で確認された9個体は大きさ42mm以上の成体で、最大個体は殻長51.0mmもあります（中本ほか2006）。

三重県総合博物館が所蔵するタイワンナツメガイは、志摩市大王町船越産の2個体で（MPM-Sh.15327）、採集日は不明です（写真2、3）。1個体は殻長38.62mm、殻幅27.89mm、もう1個体は殻長34.10mm、殻幅25.54mmで、紀北町で確認した個体に比べると小型でした。この2個体は、貝殻表面が加工されたように不自然な光沢をしていることが気になりました。お土産などの貝に施されている艶出しの薬剤が塗布されている可能性があると思われます。三重県総合博物館が所蔵する個体は、河芸図書館から寄贈されたもので、三重県総合博物館のラベルには同定者が中野 環になっていま



写真1 紀北町産：TNC-Mo.No22202

した。タイワンナツメガイが含まれていたのか記憶は定かではありませんが、2005年頃に篠木善重さんに同定を依頼された河芸図書館の標本の中に含まれていたのでしょう。その時に、艶出しの薬剤が塗布されているような光沢の貝が含まれているコレクションだと感じた覚えがあります。

最後になりますが、三重県総合博物館の宇河雅之課長には、本来なら人文分野の資料閲覧を対応されるところを、分野が異なるにも関わらず資料検索から抽出まで丁寧にご対応いただきました。記して感謝いたします。



写真2 志摩市産：三重県総合博物館蔵(MPM-Sh15327)



写真3 志摩市産タイワンナツメガイと標本ラベル

引用文献

- 江川和文・坂下泰典2005. 鹿児島県産タイワンナツメガイの諸知見. ちりぼたん, 35 (4) : 125-129.
波部忠重1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 大阪, 182pp.
中本博之・土岐頼三郎・野田圭典・江川和文2006. 和歌山県におけるタイワンナツメガイの産出状況(軟体動物門, 腹足綱, ナツメガイ科). 南紀生物, 48 (2) : 122-124.
奥谷編著2017. 日本近海産貝類図鑑(第二版). 東海大学出版部, 神奈川, 1375pp.

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

事務局から

○2025年会費納入のお願い

本会の会費は前納性です。会費納入状況等を同封しますので、来年1月末までにお振込みください。なお、退会される場合は、お手数ですが、ご一報ください。

○いせきびNo.11を同封

本誌は「三重貝なかも」による発行です。会員も募集中ですので、興味のある方は事務局の中優さん(nakamasaru1284@castle.ocn.ne.jp)まで問い合わせてください。

編集後記

短い秋でした。今号も私の終活記事に3頁を使わせてもらいました。保護種のツキノワグマを「駆除」とすると県知事が表明したのには驚きました。生物多様性保全が地球的課題となっている昨今、なかなか言いだせる言葉ではないです。役所が発するのならやはり「管理」でしょうね。次号冬号は3月発行予定ですので、奮ってご投稿下さい(善)。

自然誌だより142号 Mie Natural History Research Group News, No.142

発行日 2024年12月13日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp